

寫眞と思ひ出

——私の寫眞修行——

南部修太郎

青空文庫



寫眞も、この頃は猫も杓子もやるといふ風な、はやり物になつて、それに趣味を持つなど、いふのが變に當たり前過ぎる感じで、却て氣がひけるやうなことにさへなつてしまつた。が、いつだつたか、或る雜誌にのつてゐたゴシップによると、文藝の士の余技の内玉突と寫眞とは私が筆頭ださうだ。

無論、そんなことで筆頭など認められても、格別嬉しくもないが、そも／＼私が寫眞を初めたのは、十一二の時分のこと、年號にすれば、明治三十五年、流行物どころかしらうとに寫眞など寫せるものではないといふやうな考へのある時代だつた。

ところで、どういふ譯で、そんな子供の私が寫眞などはじめるやうになつたかといへば、その頃私は、三宅克巳氏著の「少年寫眞術」なる一書を手に入れたのだ。それは、子供向きに寫眞の沿革から撮影、現像、焼付の法、それに簡単な暗箱の作り方までを説明してある。たしか博文館發行の少年理科叢書の一冊だつたかと思ふ。それを讀むことによつて、私は寫眞に對する子供らしい好奇心と興味とを大に刺戟され

たのであつた。



當時、私の一家は長崎に住んでゐた。その長崎には、下岡蓮杖翁と並んで、日本寫眞界の元祖である上野彦馬翁が同じく住んでゐた。これは偶然「少年寫眞術」の沿革史の一節にも書いてあることだつたが、うちで寫眞を寫すといふと、いつもその上野寫眞館へ出かけたもので、その頃翁は直接撮影場に出るといふやうなことはなかつたが、頭のすつかり銀髪になつた、額の廣い、あごの角張つた翁の顔を、この人が寫眞の元祖だといふ風な一種の敬意を以て眺めたことが、うつすりと私の記憶に残つてゐる。——が、さて、その一書によつて深く寫眞熱をあふられた私は、何よりも寫眞機がほしくてたまらない。母はもとより私の望みなら先づ大概は聞いてもらへた祖父母にも盛んにせがんで見たが、

「子供に寫眞など寫せるものではない」

そんなことで、到底相手にされなかつた。それに子供だましの寫眞器の二三円でも、

當時では、可なりの贅澤品に違ひなかつたし、然るべき寫眞器など、無論買つてもらへるはずもなかつた。



仕方なくそれは諦めたが、その頃から割合に手先の器用な私だったので、「少年寫眞術」の説明に従つて、私はとう／＼寫眞器自作を志した。

薄板を組合せて名刺形の暗箱をこしらへる。内部を墨で塗る。眼鏡屋から十五錢ばかりで然るべき焦點距離を持つ虫眼鏡を買つて來て竹筒にはめ込んだのを、一方の面にとりつける。それに蓋をつける。最も苦心したのは、乾板を入れる装置の處だつたが、とに角一週間ほどの素晴らしい苦心で、それが、どうにか出來上つた。

それから或る日、町中を探し歩いてやつと見つけたのが、藥屋が主の寫眞材料店、名刺形の乾板の半ダース、現像液に定着液、皿、赤色燈、それだけは懇願の末、祖母から資金を貰つたのだつたが、胸を躍らせながら、押入へもぐり込んで乾板を装置して、庭の景色などを寫してみた一枚、二枚、三枚。

しかし、夜を待つて、また押入の中での現像の結果は、乾板の黄色い面がまつ黒になつてしまふばかり。とう／＼二ダースの乾板を無駄にしたが、影像是全く膜面に現れて來なかつた。

「そおれ御覽なさい……」

といふ母や祖父母の聲、不平はモデルにした妹達や女中までから來た。私はすつかり、しよげた。資金ねだりにも、祖母は、さう／＼いゝ顔は見せなくなつた。が、根が負け嫌ひでもあつたし、またさうなると、今までの苦心努力の報いられなかつた悔しさから、成功への要求が逆に強くなつた。そして、撮影法にも、現像法にも、無論手製の装置にも改善を加へて更に何枚かを試みたが、あゝ、それは何といふ狂喜だつたか？



或る日の午後縁側に坐らせた學校友達の一人を寫してみた乾板に遂にうつすとそれらしい影像が現れた。押入の暗闇で赤色燈に現像皿をかざしてみながら、いかに私は歡喜の笑みを浮かべたことであらうか？それからけふまでもう二十余年、私の長い寫

眞物語りのペエジにも悲喜こも／＼の出来事が繰返されたが、あの刹那にまさる嬉しさがもう再びあらうとは思へない。



その後間もない十二年の歳の秋に、私は三つ時分からの持病の喘息に新しい療法が発見されたといふので、母と共にはる／＼上京したが、その時三月近く滞在してゐた母の實家で若い叔父が寫眞をやつてゐた。それは今から思へば、七八円程の安價な組立寫眞器だつたが、それを見、また景色にしろ人物にしろ相當立派に寫し出されてゐるPOP印畫を眺めた時、私は嫉妬に近い羨ましさを感じ、かつはどれほど寫眞熱を刺戟されたか分らなかつた。そして叔父からいろいろ教へを受けると同時に、いよ／＼長崎へ歸るといふ時に、さん／＼母にせびつて漸く買つてもらつたのが二円五十錢の、至極簡単なながら速寫装置もある箱形の輕便寫眞器だつた。その買つた店といふのが、新橋の博品館の隣の今は帽子屋になつてゐる雜貨店で、狭い銀座通にはまだ鐵道馬車が通ひ、新橋品川間が電車になつたばかりの頃だつた。本石町の小西と淺沼、今川小

路の進々堂——それらが當時の有名な店だったが、とにかく東京にも寫眞器屋などはまだ數へるほどしかなかつたやうに思ふ。



三十八年の春に一家が東京へ住み移るやうになつてから、やがて二度目に買つてもらつたのが、前のにちよつと毛のは、たくらゐの五円ばかりの箱形寫眞器、少し寫眞の
 が分りかけて來た私にはとても不滿でたまらない程度のものだつた。そして、いゝ寫眞器に對する憧憬は日に日に高まるばかりだつたが、さう手易く買つてもらへる筈のものでもなかつた。

で、仕方なく小西、淺沼、進々堂あたりから寫眞器の目錄を取りよせたりして、いはば高根の花のいゝ寫眞器の挿繪や説明などを讀むことによつて、氣持を慰さめてゐた。プレモ、オオトシヤツタア、ソルントンシヤツタア、フォルカルプレんシヤツタア、カアルツアイス、百分の一、千分の一、テツサア、アナスチグマツト——さういふ寫眞用語がいかに歴亂として私の腦裡を動き、いかに胸躍るやうな空想を描かせ、い

かに儚ない慰樂を與へたことか？

「さうだ貯金をしよう、貯金を……」

或る日、私はそれ等の目録を眺めながら、せめて百分の一秒ぐらゐまでのシャツタア装置のある三四十円の寫眞器を買はうと思ひ立つて、さう心をきめた。そして、月々きまつてもらふお小遣ひを少しづつ、郵便貯金にし初め、いつも祖母がくれるお中元お歳暮の金も今までのやうに無駄には使はないことにした。



その貯金が二十円あまりになつた中學二年生の夏、それと同額ぐらゐの足し前を祖母にせがんで漸く理想に近い寫眞器を買つたそれは可成り明るいアナスチグマツトレンズに百分の一秒まで利くオオトシャツタア装置を持つプレモ形の二枚掛寫眞器で、その取框に中框を使つて大概手札乾板ばかりで寫してゐたが、處女撮影から寫る寫る、立派に寫る。五段伸の三脚の上に立て、黒布をかぶりながら焦點を合せる時の私の満足と嬉しさ、とまた誇らしさとはいひやうもなかつた。そして、家の中での人物撮影は、いふま

でもなく日曜日には可成り重いその鞆をかついで郊外へ撮影に行く。
 旅行の時にはもう戀人のやうな伴侶で、撮影、現像、焼き付の技量も自然と巧く
 なつて、學校での展覽會では得意な出品物であり、常陸の海岸で朝鯉船の出かけ
 を寫した印畫を或る専門家に見せた時には、どうしてもそれが中學三年生の素人であ
 る私の撮影、現像、焼き付にかゝるといふことを信じてもらへなかつた。



三田の文科生になつてからは、さすがに寫眞熱もさめてしまつたが、旅行の時だけ
 は、もう可なり古びた上に舊式になつたその寫眞器を相變らず伴侶にしてゐた。手
 慣れてゐるばかりでなく、割によく寫る寫眞器で、一ダースが一ダース、めつたに失
 敗もないといふやうなことが、買ふまでの苦心の思ひ出と相俟つて、それは私に長い愛
 着を持たせてゐたのである。が、大正九年の秋、たま〜ヨーロッパから歸つて來た親
 戚の人からイーストマンの葉書判の寫眞器をみやげにもらつた。それは裝置が新しく
 便利だといふ以外には、所持のプレモと大して變りもないものだつたが、大正十一年の支

那旅行なりよの時には、それを肩かたにして行つた。ところが、支那しなでは税ぜいがかゝらないので、知り合あふ在留ざいりゅう日本人たち達は、みんな立派りつぱな器械きかいを持つてゐる。いつもその點てんでは氣きがひけたが、印畫いんぐわを見せてもらふと安心あんした。撮影さつえいの技量ぎりやうでは自分が露骨ろこつにうまいなど思おもはせられ
たからである。

しかし、やがて贈り主おくぬしの悲かなしき形見かたになつたその寫眞器しやしんきは、支那しなの旅かへから歸かへると間まもなく、或る文學青年ぶんねんの詐欺さぎにかゝつてうしなはれた。最近さい廣津和郎氏わづわらうが「さまよへる琉球人りゅうきゅうじん」といふ作さくの主人公しゅじんこうにした青年せいねんがどうもその青年せいねんと同一人どういつじんらしいので、私わたしはちよつと驚おどろいてゐる。



中學時分に買かつた寫眞器しやしんきも、その少すこし以前いぜん或る寫眞好きしやしんずきの友達ともだちに贈おくつてしまつたので、それ以來しよらわたし暫もく私わたしの手元もとには寫眞器しやしんきの影かげがなくなつてしまつたがその翌年よくのことわたし、私わたしは偶然ぐうぜんある人ひとから、やゝ身みにあまるやうなのを譲ゆづり受うけることが出來た。英國えい製せいで、シイ・テツサア四・五鏡玉しんぞく、千百六十分の一秒べうまで利きくシヤツタア付つの、手札形ふだかたフレツク

ス、素人用としては殆どこの上ないものといつて差支へないのだが、それで一時盛返した熱も今は又すつかりきめきつて、それは空しく押入の奥でほこりにまみれてゐる。

あの手製の暗箱をこしらへた頃、毎日目録を眺めては楽しんでゐた頃、汽車の疾走などを大騒ぎで寫して喜んでゐた頃、それらを思ひ返すと、私の胸には何かしら變な寂しさが湧いてくる。假に今のレフレックスのやうなのが、そのころの私に授けられてゐたとしたら？



しかし、いろいろ合せて、もう千余枚を數へる印畫のアルバムを時折繰眺めるのは、楽しく愉快である。そこには私及び私の周圍をなした人達や旅の風景などの過去の一面々々が、あざやかに記録されてゐる。

一體私は、この頃流行のいはゆる藝術寫眞には、何の感興も持たない。あの變に氣取つた、いかにも思はせ振な、しかも一種の型にはまつた印畫のところがいゝといふのであらう？

要するに、寫眞の本領は、興味はさういふ意味の記録を、いひ換れば、
 して、思ひ出の樂さや回想の懐かしさを與へるところにある。そして、
 や面白味は、遂にそれ以上に出るものではないと私は思ふ。

(一五、四、二七)

青空文庫情報

底本：「サンデー毎日」大阪毎日新聞社

1926（大正15）年6月27日発行

初出：「サンデー毎日」大阪毎日新聞社

1926（大正15）年6月27日発行

※つづれ、かすれでルビの濁点、半濁点の有無を判定できないところがありました。訂正
注記、ママ注記することは避けて、見えた通りに入力しました。

※「変体仮名え」は、「江」をくずした形です。

※「変体仮名え」と「こと」の外字注記中の数字は、「ページ段数行数」です。

入力：小林 徹、小林 誠

校正：富田倫生

2011年5月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

寫眞と思ひ出

——私の寫眞修行——

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 南部修太郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>